
序 文

2015年4月に「世界仏教文化研究センター」が創設されました。

社会をとりまく環境は刻々と変わっている。この序文を書き始めた頃、ある新聞記事に目がとまりました。今から117年前の1899年2月27日、移民790人を乗せた船が南米ペルーに向け日本を出発したというものです。少子高齢化の現在では想像しがたいことですが、その頃の日本は、繁栄の光を追って海外に進出する一方で、辛く悲しい影をも落とす集団移民が盛んな時代だったのです。ハワイや北米にはすでに多くの日本人が移住し、同じ年に北米・サンフランシスコに浄土真宗開教の拠点が発立されました。そういった開教の歴史の流れに位置づけられるのが、2006年パークレーに建立された浄土真宗センターであり、本学の海外拠点としてその一角に設けられた Ryukoku University Berkeley Center でした。

インドに発祥した仏教は、シルクロードを経て東漸して中国に伝わり、朝鮮半島を経てアジアの東端・日本に伝わりました。そして日本で熟成された仏教の叡智が海を渡って世界に飛び立っていったのです。西本願寺の僧侶を育成する学問研究機関、「学寮(学林)」に始まる本学は、1900年に「仏教大学」という大学の呼称を得て、1922年に現在の「龍谷大学」に至りました。龍谷大学が建学の精神を発揮して、そのような歴史をもつ仏教のもとに世界中の研究者が集い、交流し、発信する拠点となることを目指して設立されたのが「世界仏教文化研究センター」です。

記念すべき開設初年度の事業を以下の通り行った。

6月5日に、「2014年沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念学術講演会」を開催した。仏教の普及を目的として世界的に事業展開する仏教伝道協会(BDK)の協力を得られたことは有意義であった。その年に出版された優秀な外国語仏教図書を顕彰するこの講演会は、来年度から恒常的に龍谷大学において開催することになった。

7月23日に、設立記念講演会として「仏教が繋ぐアジアのネットワーク～親交の架け橋～」を本願寺国際センターの協力のもと開催した。仏教を研究する際その基礎となる原典をめぐり、ネパール写本の現状と仏教学の最前線の研究について、および仏教写本の宝庫・ネパールにおける震災直後の仏教者の取り組みについて取り上げた。

10月20日に、設立記念国際シンポジウムとして「仏教を通じた日韓文化交流の歴史と展望—未来への伝灯—」を東国大学校との共催で開催した。日韓国交正常化50周年記念事業の外務省認定を受けた。また両者とも浄土真宗本願寺派から多大なご支援いただいたことに感謝の意を表したい。

11月30日に、設立記念事業として「Hiroshima Peace Memorial ヒロシマ被爆70年追悼 特別上映 知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」を開催した。結果として、記念事業を貫く理念は「平和への願い」であったと位置づけられよう。東国大学校との国際シンポジウムにおいて、「懺悔なき許し」ということが平和にかかわって問題提起されました。1500年にわたる交流史をもち、最も親密な関係にある隣国の韓国と日本の間には、戦争責任をめぐってわだかまりがあることは否めません。その感情はどのように克服されるのか。仏教の立場からその問題に踏み込んだ興味深い発表であった。

仏教で重視する概念に「忍」があります。インドの言葉では「クシャーンティ」とも表現します。一般に「忍」とは、「忍耐」の意味で理解されますが、仏教では「容認」という字義でも用いられます。事実関係を洞察する智慧にもとづいて許容することを意味します。耐え忍ぶといっても、我を張って辛抱することではなく、むしろ我を捨てることを意味し、慈悲の発動ともかかわる重要な概念なのです。『大般涅槃経』によれば、ブツダの遺骨を求めて集まった諸部族が、それぞれに我がものにしようと、遺骨を受け取る資格を主張して反目していた。あわや戦争になろうとしたとき、「ブツダは〈忍〉を語る方であった」というある人の発言をきっかけに、事態は収拾し、遺骨は等しく分配されたといえます。許しは、相手に条件を付けることによっては成り立たない。自らを内省することが伴わなければならない。「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みの止むことはない。怨みをすててこそ止む。これは永遠の真理である」（中村元訳）という『ダンマパダ』の言葉はよく知られている。平和を願うとき、どのように考え、語り、そして行動するのが我々に問われている。「〈忍〉を語る方」は、平和を論じるとき、仏教の立場をあらわすキーワードの一つになるであろう。

本活動報告書には、世界仏教文化研究センターの傘下にある人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター(CHSR)、アジア仏教文化研究センター(BARC)の研究活動とともに、仏教文化研究所の研究活動についても掲載した。今後、仏教文化研究所を改組し、2017年度中に世界仏教文化研究センターへと完全に一本化を図る予定である。

本研究センターは、大きく分けて(1)基礎研究部門、(2)応用研究部門、(3)国際研究部門の三部門から成ります。

(1)基礎研究部門では、仏教の教理・教学の研究、歴史文化の研究、さらに、本学が所蔵する貴重書のほか、各種の写本・古文献などの研究を進めています。これは仏教文化研究所の研究プロジェクトと密接にかかわります。

(2)応用研究部門では、CHSRの名の下に、現代社会に生きる人びとの苦悩と向き合い、仏教の思想・教学を応用し、教育、医療、ビハーラ活動、グリーンケア、人権擁護、非暴力と平和な世界の構築、生命倫理、環境保護などにかかわって、実践を生み出す研究を進めています。

(3)国際研究部門では、仏教文化研究所が蓄積した資産を活用しつつ、国際シンポジウムの開催などを通して海外諸宗教研究機関との交流を推進し、国際性をそなえた若手研究者

の育成と国際的な研究者交流を進めています。E-Journal の刊行も計画中であり、積極的に国際的な情報発信を行っていきます。

以上のような三部門を有機的に関係させつつ、グローバルに展開させるところに成り立つのが世界仏教文化研究センターです。その活動理念は、2015 年度文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成事業として認可され、今後 5 年間は BARC の研究活動を通して具現していきます。

2016 年 3 月 3 日

センター長 能仁 正顕